
僕と先輩

尼野邪紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と先輩

【Nコード】

N8895R

【作者名】

尼野邪紅

【あらすじ】

僕と先輩は仕事の依頼で吸血鬼を捕獲しに行く。先輩との初仕事。でも、僕は知らなかった…先輩のもう一つの顔など…

普段の顔（前書き）

お久しぶりです。連載と言っても2話しかないので連続投稿します。
相変わらず拙い文章ですが、宜しければ読んで下さい。

普段の顔

今晚和…皆様。今日僕は何と先輩エクソシストの付添い（見学）を
しています。一緒に行動する先輩…とても凄いです！

何でも“血染めのマリア”とか“冷酷な魔女”とか“無慈悲な聖女”
”とか…って言っても噂でしか無いんですけどね。

だって僕、仕事見た事無いし…だいたい…

「きゃあ！」

たった今、僕の隣を歩く凄いと噂の先輩が何も無い地面で転んだし…

「いたた…」

「もう、何やってんですか？先輩…」

僕は転んだ先輩を起こそうと手を貸した。

「えへへ…有難う。」

笑いながら僕の差し出した手を取る先輩…

「ったく…それにしても…」

先輩を起こしたと同時に…

「重たいですね。太りました？」

「なっ！」

顔がみるみる赤くなる。

「女の子に対して失礼だよ！武器を持つてるから重いんだって！！」

必死に反論する先輩…可愛い。

「まあ…そういう事にしておきましょう。」

武器を持つてるにしても全くそうは見えないくらい先輩は細い。本当に武器を隠し持つてるのだろうか？まあ分かってて、からかったんだけど…

「本当なのに…」

口を尖らし反論し続ける先輩。この人は冗談というのを知らないのだろうか？まあ、女性にとって禁句の“体重”の話をした僕が言うのも何だが…

「ほら、先輩！目的地が見えてきましたよ。いつまで俏げてんですか？」

「うう…意地悪。」

あ、ヤバい。やりすぎた…先輩が涙目になってる！

「…からかって悪かったです。謝りますから、機嫌直して下さい。」

僕は先輩に「ゴメンナサイ」と言った。すると…

「あ、私こそゴメンナサイ…泣いちゃって。」

メソメソしながら涙を手で拭き逆に謝る先輩。アンタ、どんだけ人好いんだ…

「何で先輩が謝るんですか！僕がどう考えても10割悪いでしょ？」

つまり全部。そう言ってるのに…この人は。

「え？でも…からかっているのを察しない上に泣いちゃった私も悪いと思うな…だから。」

嫌な予感。

「私が10割悪いよ。」

的中。どうしてそうなるんだ？皆さん、解りますよね？僕が10割悪いのに…

「いや、だから僕が…」

「私だよ。」

「僕！」

「私！」

「10！」

「10。」

「…。」

「…。」

ハアハア…幼稚だ。幼稚過ぎる…本当、良い年した男女が何やってんだか…

息を整えてると先輩が…

「解った…」

嫌な予感その2。

「じゃあ、お互いの主張を尊重して…君が5割で私が5割ね。」

的中…何が解ったんだ？全然理解してないじゃん！駄目だ…この人。

「じゃあ、そうと決まった所で…行くよ。」

先輩は問題が（一方的に）解決してスッキリした様子で目的地まで走っていた。

「納得いかね…」

後ろの僕は先輩に届かないくらい小さな声で呟いた。

よく考えたら皆さんに僕達の関係を話してませんでしたよね？

僕達は、同じ教会で育った…いわば“姉弟”みたいなモノ。先輩が僕より3つ年上。ちなみに僕が彼女を“姉”ではなく“先輩”と呼ぶのはただ単に仕事に就いて自立した僕なりのケジメである。これでも就く前は“姉さん”って呼んでたんですよ？

先輩と同じ職場…エクソシストに就いたのは半年前。何故、先輩と

同じ職場にしたかというところ…解りますよね？あのお人好しが心配だったからですよ！弟として。正直、変な虫が付かないか不安だったし…！…あくまで弟として。

…。ええ！そうです！僕はシスコンですよ！！それが何か？

「何、さっきからブツブツ言ってるの？」

「ぎくっ」

隣の先輩が不思議なモノを見るような眼で僕を見ている。

「べ、別に。」

慌てて目を反らす僕に先輩はとんでもない発言をした。

「シスコンなの？」

「ぶっ！」

確かに言っただけ…声に出してたっけ？

「出てたよ。」

「ウソだ〜！」

絶叫する僕に…先輩はまたとんでも発言。

「シスコンなら…私の事、昔みたいに“姉さん”って呼んだら良いのに…」

「良い訳無いでしょ！だいたい今は“上司”（先輩）と“部下”（僕）”なんだから呼べる訳無いでしょ…！」

「む…別に私は構わないんだけど…」

「だ・か・ら…」

反論しようと先輩を見ると…あれ？何で…

また涙目になってんだ？

「馬鹿…」

先輩が呟いた。馬鹿とは何だ！僕だって…

「もう…良い。早く入りましょ？」

いつの間にか涙を引つ込めた先輩が僕を促した。どうやら目的地に着いたようだ。

今夜の仕事は目的地…古い墓地に居る吸血鬼を捕獲という事だった。

被害者は若い女性。亡くなっではないが…血を吸われた女性は夢遊病のように吸血鬼を求め自ら血を吸われに行く。吸血鬼の唾液には異性を惑わす能力があり被害者も無意識の内に墓地へと向かっていく。

被害者の両親は毎晩聞く物音の正体が気になり調べてみた。最初は猫か何かが入ったのだろうと思っていた…が、ある晩に窓から自分の娘が外へ出て行ってるのを目撃。跡を着けてみると古い墓地で娘と見知らぬ男が抱き合っていた。しかし、おかしい。娘の顔がみるみる白くなっていく。よく見ると娘の首筋に顔をうずめ血を吸う男…血を吸い終わった男は娘に何か耳打ちすると闇に消えてしまった。

取り残された娘はまるで何も無かったかのように自宅へ帰っていった。

翌日、両親は昨晚の事を娘に聞くと…娘は覚えていなかった。話すべきか迷ったが両親は娘に経緯を話す。すると娘は驚き、鏡で自分の首筋を見た。そこには…

二つの小さな穴…噛み痕があった。

「…で被害者の両親はすぐに教会に依頼。こんな感じですかね？」

吸血鬼の気配を伺い、報告書を読み上げながら先輩に確認する。

「ふん。」

「ふん…って今から仕事するんですよ！大丈夫ですか？こんな調子で…」

初めて先輩と仕事を組み、僕にとっても初めての現場。いつもと変わらない先輩に思わず…

「全く、誰だよ。この人に“血染めのマリア”とか“冷酷な魔女”とか“無慈悲な聖女”なんて通り名を付けたの…」

独り言のつもりだった。

「え？今、何て…」

「！…何でも無いです。独り言なんで気にしないで下さい。」

しっかり耳に届いてたみたいだ。僕が通り名を口にした途端、先輩から…

一瞬、殺気を感じた。

本当に一瞬だけ。すぐさま消したようだけど…

「それより、先輩。間違えないで下さいね？ “捕獲” ですからね。倒しちゃ駄目ですよ？」

「ちっ…」

あれ？ 今、舌打ちした？

「あ、捕獲よね？ 解ったわ。」

…何だ。気のせいかな。この時、僕は気付いてなかった…あの通り名の意味を。

仕事の顔

さあ、いよいよ本番です。待ちに待った（？）吸血鬼と御対面。奴は被害者に夢中で僕らに気付いてなかったみたいで…

「そこまでだ。」

先輩が吸血鬼に声を掛ける。ん？こんなに低かったつけ…それに言葉遣いが悪くなったような…

「な、何者だ！」

「見て解らないの？ああ…血ばっか吸ってるから頭に栄養が行ってないのね。」

…。誰？アンタ！

「お食事前に悪いけど…没収！」

先輩は被害者に近付き吸血鬼から引き離れた。

「さて術を解かないと…」

僕は吸血鬼の妖術の解き方を興味津々で見っていたが…

「そおくれ」

バチーン。

何とこの女…あろう事が被害者に平手打ちしやがった！

「…！此処は？」

被害者は平手打ちで意識を取り戻した。

「此処は墓地。あれが貴女を襲った吸血鬼。」

先輩は、指を吸血鬼に向ける。当の吸血鬼は余りの展開の早さに着いて行けなく呆然としていた。

「…何だか頬の辺りが痛いわ！」

…可哀想に。手痕が着いてるじゃないか…

「まあ！卑劣な吸血鬼。いたいけな女性を傷付けるなんて許せないわ！！」

犯人はお前だろ！罪を擦り付けるお前が最低だ！！

「頬を早く冷やさないと大変！腫れてしまっわ。さあ、お逃げなさい。此処は私達に任して。」

被害者は先輩に促され逃げるように自宅へ帰っていた。それを呆然と見ていた吸血鬼…

「はっ！…な、俺の餌が無くなってる！！」

「アンタがぼくとしてたから帰っちゃったわよ。」

犯人はアンタの目の前だよ。吸血鬼さん…ああ、吸血鬼がわなわな怒りに震えてるよ…

「貴様…こうなったらお前を餌にしてやる!」

「やられるもんならやってみな!」

吸血鬼が先輩に迫ってくる。先輩は攻撃を避ける。

「おのれ、ちょこまかと!」

「そんなへボいのじゃ当たらないわよ。」

「ならば!」

吸血鬼が霧になり先輩を包んだ。

「これでどうだ?」

霧がだんだんと人型になり先輩の背後に吸血鬼が居た。

「先輩!」

向かおうとすると…

「動くな!この娘がどうなっても良いのか?」

吸血鬼が先輩の背後で抱き寄せ、人質に取った。

「くっ!」

「私は大丈夫よ…ソイツの言う通りにしなさい。」

先輩は涼しい顔で僕に声を掛ける。しかし、吸血鬼はそれが気に入

らない御様子。

「お前、立場解ってんの？捕まってるんだぞ？」

「理解してますが、何か？」

「！…まあ良い、それにしても…」

僕は吸血鬼の様子を窺いつつ、先輩を心配する。

「お前、イイ匂いがするな…」

「マア。褒メラレテ、ワタシ感激！」

カタコト！怖っ…若干引いてるよ吸血鬼も。

「…。それに顔も可愛いね？アンタ…彼氏居るの？」

取って付けたように褒めだしたな吸血鬼も…彼氏って先輩に対する挑発かな？

「居ますよ。だから離して下さいな？」

「ふ〜ん、居るんだ彼氏。」

へえ…居たんだ彼氏。

…。

彼氏！そんな、馬鹿な。だって僕が見る限り彼氏と一緒にの所を見た事が無いぞ！！

「どうしよかな？俺、アンタの事が気に入りそうだしな…」

「諦めて下さい。」

「…嫌。」

僕が先輩の“彼氏居る宣言”でショックを受けてる間に吸血鬼が先輩にキスをしようとする。

「や、止める！」

僕は叫んだ。が…

「見物客は大人しく見てなよ？」

吸血鬼が笑いながら僕を見て挑発する。でも…

「痛っ！」

「誰の許可を得て口付けしようとしたんだ？てめえ。」

先輩が何処から取り出したのか吸血鬼の胸に銀のナイフを突き立てた。

「がは！」

苦しそうに血を吐きながら喘ぐ吸血鬼に先輩は容赦なく…

「こんなので倒れないでね？」

「くっ…こんなので倒れるか！」

「そうだよな？こんなのじゃあ、アンタがしてきた罪なんて洗い流せないもんね？」

ゾク！

嗤ってる。怖い。怖すぎる。あの人は誰だ？本当に先輩なのか？

「…それより良いのか？胸の傷が浅いようだが…これじゃ俺は倒せない。」

「ああ、その事。別に良いの…これからもっと大きくしてアゲるかっ」

ゲシ！

先輩は吸血鬼の胸に刺さったナイフを思いつ切り蹴り上げた。

「グアア！」

「あら？どうしたの？御希望の通りにしてアゲたのに。」

「…。クソ！」

吸血鬼は先輩から離れ…こっちに向かってくる！

「ならコイツから血を吸ってやる！」

「なっ…」

あっという間に吸血鬼に捕まった僕。あんなだけ、先輩に傷を負わされたのに離れてる僕をすぐに捕らえた。

「先輩、僕の事は構わずに僕ごとコイツを倒して下さい。」

「お前…」

「コイツに血を吸われれば僕も吸血鬼になる…だから、倒して下さい。」

「煩い。黙れ！」

吸血鬼が僕的首筋に噛み付こうとする。僕が目を閉じて痛みを耐え

ていると…

「止める！」

先輩の低い声で吸血鬼は一瞬たじろくが無視する。そんな吸血鬼の態度に気にせず続ける。

「おい、それ以上“私の彼氏”に何かしたらどうなるか分かってる？」

「…。」

黙る吸血鬼。僕は目を開けて吸血鬼を見る。近いせいか表情が怯えてるように見えた。

「早く離しなさい。さもなくばアンタの胸に刺さったナイフが心臓に達するわよ？」

「……て。」

先輩は聞こえなかったんだろうが僕にはしっかり聞こえた。吸血鬼が小さく“助けて”っていうのを…

「何を言ってるの？早くしなさい！もしかして、何も出来ないと思ってる？残念ね…ナイフには魔法が掛かってるから私の意志で傷を広げるのも可能なのよ。」

嗤う先輩。本気だ…何とかしないと吸血鬼が戦意喪失なのは分かっている。僕が声を掛けた。

「早く、僕を離れた方がよいよ。」

しかし、吸血鬼は茫然として僕の声が届いていない。ブルブルと震え、寧ろ僕に力強くしがみついていた。

「ちよっ…お前どういふ状況か分かってるのか？しっかりしろ！」

駄目だ。まるで聞いてない。…全くどいつもこいつも世話に焼ける。先輩は吸血鬼が僕を離さないで攻撃をしようとしてるし。

「待つて！先輩！！」

「待てない…」

「コイツはもう、戦意喪失ですよ！」

「それでも、待てない！」

強い口調で僕の説得を拒絶する。どうして？

「赦せないの…」

「え？」

「君を穢れた手で触れるソイツが…」

「…。」

「だから、現場に連れて行きたくなかった。私のこの姿を見られたくなかった。」

静かに語る先輩は今まで見た事無かった。そんなに僕を想ってたなんて…

「もう、良いよ。“姉さん”」

「！」

「僕は無事だから、さっさとコイツ捕獲して帰ろ？」

「…うん。」

こうして、吸血鬼を捕獲し僕は初仕事を終えた。現場から帰る途中に僕と先輩は教会まで歩いて帰る。

「そーいえば、先輩に彼氏居たなんて知りませんでした。」

「なっ！」

「さぞかし、カッコイイ方なんでしょうね？」

クソ！僕は何の為にこの仕事に就いたんだ！！

「ちょっと、待って！違うの。」

別に今更、否定しなくても。先輩の誤魔化す態度に腹が立ってしま
い…

「違うって？」

「だから、あれは吸血鬼の策略に乗っただけで…」

「いい加減にしてよ！」

いきなり怒鳴った僕に驚く先輩。だつて…

「いつまでも弟扱いしないでよ！姉さんが好きなのに！！横から出てきた男なんかに渡すもんか！！姉さんは僕の…」

「もう、さつきからそう言ってるんだけど？」

「…はあ？」

「だから、さつきと言つか吸血鬼に君が捕らわれた時に“彼氏”つて言っただでしょ？」

言っただけ？思い返してみれば…

「私の彼氏に手を出したら」

あ。

「ちょっと！大丈夫？赤いけど…」

「五月蠅いですよ！先輩！！」

「ムカ！さっきまで姉さんだったのに…」

「そっちこそ、僕の事を“君”って言ってる癖に！」

「…じゃあ、名前で呼ぼうか？」

「そうして下さい。僕も言いますから…」

せいの！

- E N D -

仕事の顔（後書き）

二人の様子を見てた吸血鬼は怯えながら…

「やってらんねえ…」

と呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8895r/>

僕と先輩

2011年7月15日08時32分発行